

# 横浜大空襲と三溪園—三溪園はなぜ爆撃されたか—

講師：野村弘光様（原地所株式会社常務取締役）

11月の定例研究会は、野村弘光様をお招きしてご講演をいただきました。三溪園は昭和20年5月29日の横浜大空襲の被害は免れましたが、6月10日の爆撃で園内の建物や庭園に被害を受けています。爆撃を避けるべき日本の文化財をまとめたものとして知られる「ウォーナー・リスト」にも掲載されていた三溪園が、なぜ爆撃を受けたのか、野村様の少年時代の体験談を交えながらお話いただきました。



自作の図や模型を使って説明してくださいました。

今般は古地図で見たサムライ商会のご子孫野村翁のお話に感激しました。三溪翁の時代を下り、小生は立野に通う生徒で通学路を外れ級友と崖を遊び場に気味悪く避けたのも多分お話の防空壕の跡、という世代です。当時外人校セント・ジョセフ・カレッジが閉まっているとニューグランド隣りで焼け跡の鉄条網を潜って三角ベースを始め、2～3階の窓からコックさんの「今はファウル」とか「セーフ」との声が耳に残っています。残念な記憶は亡父が終戦の頃、真空管でレーダー開発中に外地敗戦を傍受しても他言できず、伊勢山に向かうB29に届かぬ曳光弾を揺り椅子で眺めたとの語り伝えで、当時につながる講師の証言は真に貴重と思いました。（金子彰）

野村さんの被爆の謎を解く講演は、私にとっては極めて興味深く、又期待するものであった。不肖山崎、10年前から“演題”に関する調査・研究に、生涯学習を心掛けており、その結論は後世の歴史学者に託したいと思っている。

有名な“ウォーナー・リスト”（国内138か所の文化財施設）に記載されているのに、“何故爆撃を被ったのか”。謎の究明の一部を、野村さんははっきりと述べ、「空爆を受けたのは“ウォーナー・リストの所為（伝説・恩人説）ではなかった」と。まさしく戦争の原理は勝利にあり、之は真に我が意を得たもので、ウォーナー・リストは文化財保護が目的ではなく、その伝説は現実を無視し、GHQと日米同盟政策の作り話の一環であったものと私は考えているのだが？

昭和30年6月9日（1955）、ウォーナーはケンブリッジ（マサチューセッツ州）の自宅で脳出血により73歳の生涯を閉じた。翌7月9日、鎌倉円覚寺で法要がしめやかに行われた。同6月9日付で古美術保存上多大な貢献をしたことにより、政府は外国人で最高の勲二等瑞宝章の授与を決定した。ウォーナー伝説は、それから日本政府公認の美談となったのである。（山崎宣晴）



講演風景

会員の山崎さんからの希望により、山崎さんがかつて執筆した随筆を紹介します。

平成 15 年 7 月 30 日

山崎宣晴

（随筆） 三溪翁と Dr.ラングデッン・ウォーナーとの出会い

有名なウォーナー・リスト（138 箇所の文化財施設）に記載されているのに（地図上には 2 重丸がなかった）何故、三溪園が爆弾攻撃を受けたのか。曰く、高射砲陣地や特殊潜航艇基地があったから。曰く、誤爆であった、など。だが歴史は語る。そのリスト配布先対象は軍将官であり、その活用状況判断やどれだけの考慮がなされたかは不明であるとか。

小堀遠州を“小心翼翼たる俗吏”、“悪趣味な虚飾茶人”、と忌み嫌う三溪翁と遠州信奉者であるウォーナーとの人間関係はいかにあったのか。因にウォーナーは岡倉天心に師事し、横山大観や下村観山とも親交があったと聞きおよんでいる。更に三溪翁と、Dr.ウォーナーは共に、美術や古建築愛好者の間柄であるのに、ウォーナーの爆撃に対する徹底した援護はなかったのか、疑問は残る。

戦争早期終結上、軍事戦略上やむを得ない状況だったものと私は判断しているが、何か釈然としないのである。

唯一思うことは、三溪翁が破壊された外苑や桃山御殿を見ずに身罷られたことは、天の思し召しなのであろうか。